

中流住宅の平面構成に関する研究

第 15 報 北入り系列平面事例による発展過程の実証的考察 一その 3 社宅系・明治鉱業、古河鉱業

○ 正余員 川島 浩孝\*5 同 青木 正夫\*1 同 竹下 輝和\*2 同 磯貝 道義\*3  
同 友清 貴和\*3 同 宮里 義文\*4 同 中園 真人\*6 同 宮崎 信行\*5  
同 岡 俊江\*5 同 秋元 一秀\*5 同 川崎 光敏\*5 同 長嶋 洋子\*5

はじめに

本報では、発展過程のバリエーションが見られる明治鉱業古河鉱業2社の社宅を取り上げて、北入り住宅における平面構成の発展過程を考察する。

明治鉱業は明治20年に明治坑を、同23年に赤池坑を取得し、同41年両坑を合併して赤池鉱業所を設立、昭和5年に平山坑を買収し、平山鉱業所を設立している。また古河鉱業は、明治29年に目尾坑を、昭和14年に大峰坑を取得する。

1 明治鉱業社宅

STEP 1 (図-1)

明治鉱業社宅は、図-1の様に台所を北面に設け、その南面に茶の間をとり構成を基本とする。4室構成では、次の間とは別に茶の間を南面にとり、3室構成(4室構成のうち1室を離れとする事例も含む)では茶の間が次の間の位置にある。

図-1の事例の持つ問題点は、前報までに述べた内容と同様に、家族の便所への動線が接客時に座敷の前を経由すること、また女中の便所への動線が茶の間を通過することである。

STEP 2 便所の移動 (図-2)

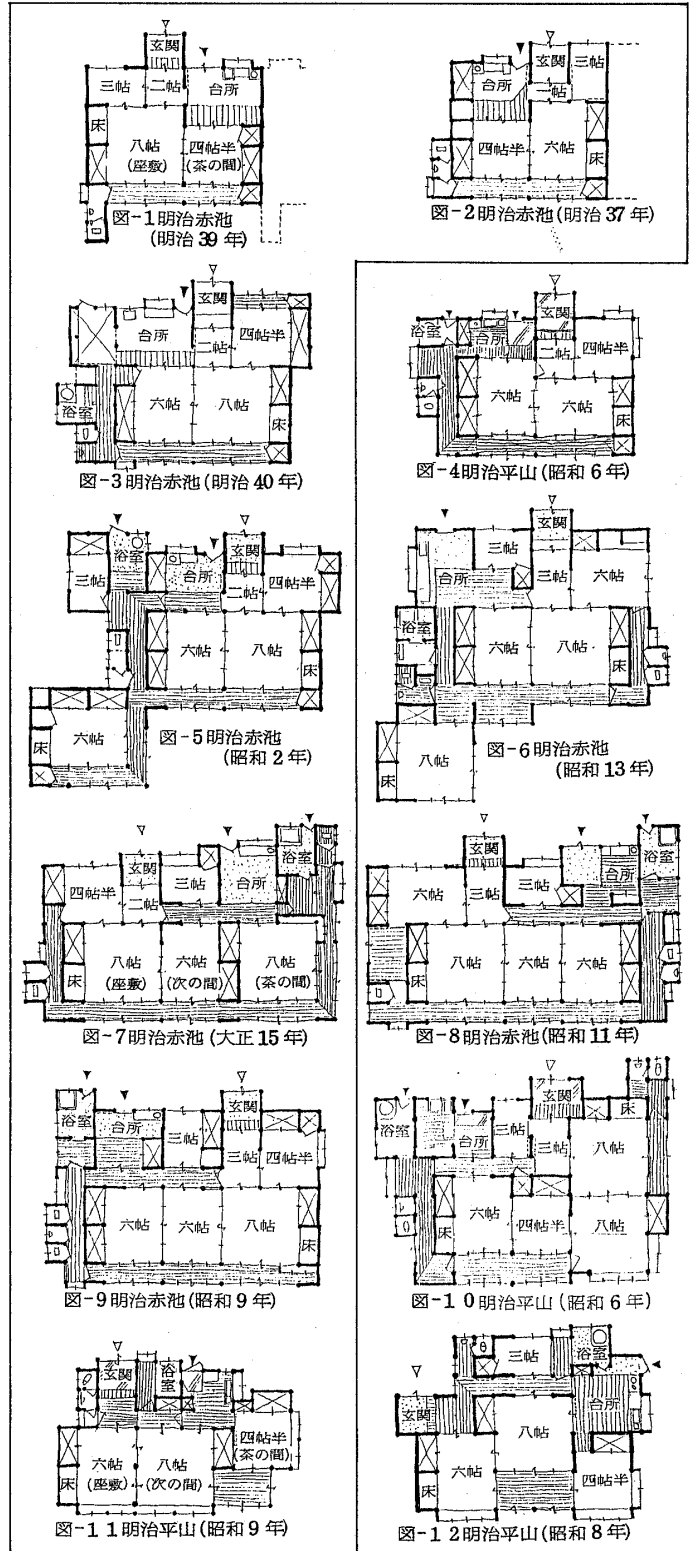
図-2では、便所が茶の間側にヒラいており、座敷前の便所への動線の問題は解決される。

STEP 3 タテ中廊下の発生 (図-3,4)

図-3の事例では、設備前にタテ中廊下が設けられ、女中の台所から便所への動線は、茶の間を通過せずに確保されている。しかし、物置を経由するという不完全な解決である。また、図-4の場合も玄関の間から台所・便所・浴室への女中動線は茶の間を通過する。

		社宅棟数	納屋棟数
明 治	赤 池	106 (263戸)	296 (1965戸)
	平 山	不 明	不 明
古 河	目 尾	28	669
	大 峰	不 明	不 明

表-1 明治・古河鉱業社宅構成 (明治43年現在)



A Study on the Planning of Middle-class Houses

Pt.15 Positive Consideration of the Developmental Process by Cases of Housing Plan

of the Northern Entrance (3) — Meiji C. Mining Co. & Furukawa C. Mining Co.

KAWASHIMA Hirotsuka et al.

STEP4 台所通り抜けによる動線処理(図-5,6,7,8)

図5では、茶の間の通り抜けの問題は、台所の一部を通り抜け部分とすることにより解決されている。しかし、いまだ空間化されていない過渡的段階である。図7は次の間とは別に茶の間を設けた4室構成の事例であり、基本的に同じ解決手法を用いている。

STEP5 ヨコ中廊下の発生とコの字型廻り廊下の完成(図-9,10)

図9では、台所の通り抜け部分に建具が入り、ヨコ中廊下(通り抜け空間)が確立されている。しかし、便所・浴室は端部に位置するため、台所と茶の間は分断される。

STEP6 中廊下型平面構成の完成(図-11,12)

図11は、浴室・便所を北面の玄関側に設け、台所と茶の間を連続させている。こうして、明治鉦業においては、昭和10年頃、北入り中廊下型平面構成が完成している。

② 古河鉦業社宅

次に、古河鉦業社宅の場合は、2通りの発展過程が見出せる。図17のように、便所が床裏に位置する型を基本として、一方は便所が次の間側に移動し、設備が集中し、行中廊下が完成する過程(図13→15→16)であり、前述同様の発展段階を経る。他方は、便所が床裏に残ったまま中廊下が形成される過程である。以下、後者の場合を考察する。

STEP1 (図-1)

図17の事例は、先述同様女中や家族の便所動線の問題や、女中の茶の間通り抜けの問題を持つ。

STEP2 ヨコ中廊下の発生(図-18)

図18では、茶の間と次の間の間にヨコ中廊下がとけ入り、女中の茶の間通り抜けの問題は解決されている。便所は、この段階でも床裏に位置する。

STEP3 ヨコ中廊下の延長による便所動線の解決(図-19,20)

図19では、便所は座敷側にとられ、茶の間前のヨコ中廊下が便所の位置まで延びている。こゝより、女中の便所への動線は、次の間を通過せず、また家族も座敷前を通らずに便所へ行ける。しかし、これらの動線は、依然 非常に長い。

STEP4 設備の集中化(図-21,22)

図21は、便所がヨコ中廊下の端部、台所側にとられ、設備が集中した事例である。家族や女中にとり使いやすい位置にあるが、逆に客の便所及び浴室への動線は、茶の間と次の間の間を通過する。特に、図22の様に台所と茶の間が分断され、しかも台所に建具が入っていない場合には、さらに問題がある。

STEP5 中廊下型平面構成の完成(図-23,24)

図23は、昭和33年に改築された事例である。便所は玄関脇にとられ、客も家族も使いやすい位置にある。一方で

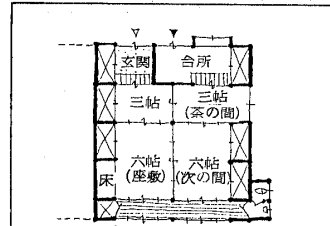


図-1 3 古河目尾(大正2年)

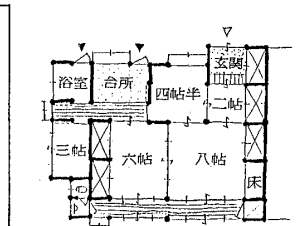


図-1 4 古河目尾(大正8年)

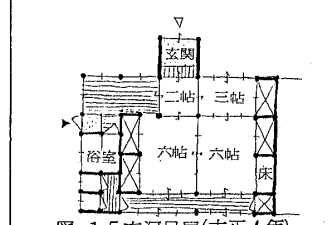


図-1 5 古河目尾(大正4年)

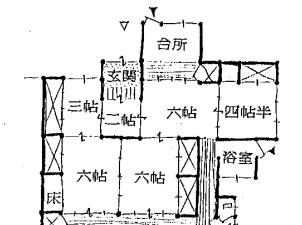


図-1 6 古河目尾(昭和11年)

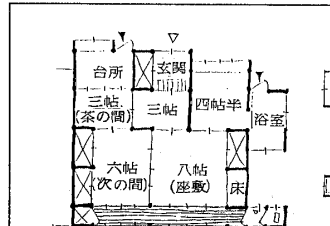


図-1 7 古河目尾(大正6年)

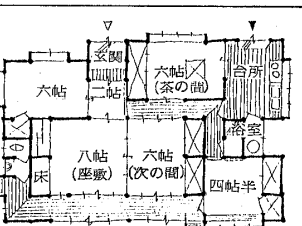


図-1 8 古河大峰(昭和15年)

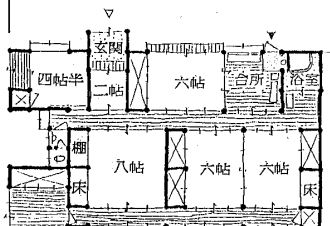


図-1 9 古河目尾(昭和7年)

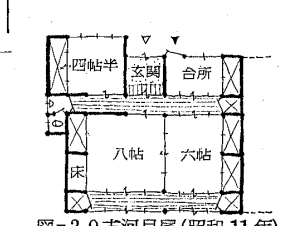


図-1 10 古河目尾(昭和11年)

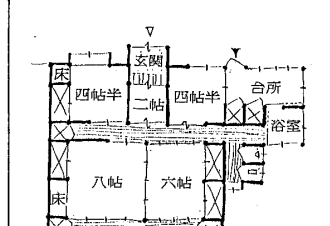


図-1 11 古河目尾(昭和13年)

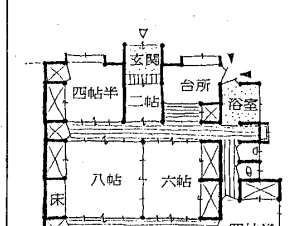


図-1 12 古河目尾(昭和11年)

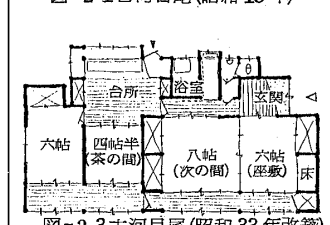


図-1 13 古河目尾(昭和33年改築)

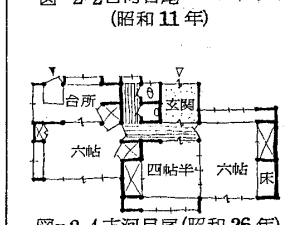


図-1 14 古河目尾(昭和26年)

茶の間の南面化も計らわれており、北入り中廊下型平面が、完成している。

参考文献

「日本炭硯誌」 高野江基太郎 明治44年  
 「筑豊石炭鉦業50年史」 筑豊石炭鉦業会 昭和10年

\*1九大教授・工博 \*2同講師 \*3同助手 \*4同技官 \*5同大学院生 \*6大分大助手